

竹原の花火 〈竜勢物語〉

小野沢 良秀

〔高井〕6号 昭和43・3・10

明治三十四年十月の末、竹原龍勢の長い隊列は蟻の行列の様に立ヶ花の船橋へ差しかかった。この朝竹原を立った二十三本の龍勢の長い列、一番先頭の大龍勢はトンボにしてかつぎ、あとは二人又は三人でかつぎ、列の後尾に荷車が一台つゞいた。これには色々の道具や弁当など入れた大長持が積んであった。

この行列の一番前には高張提灯を高々と立て、つゞいて戦国の旗差物の様な旗が進んだ。そして大きなホラ貝をボーウボーウと吹き鳴らし、全員わらじの緒をしめてまるで出陣の様な光景だったという。

龍勢という字は「りょうせい」と読む。長さ三、四間から五、六間の長い竹竿に板で風切の羽根をつけ、丁度大きな矢の様な形をしており、先端に火薬をつめた筒をつけこれが火を噴いて、矢はまっすぐに空へ昇ってゆく。この矢を「火矢^{ほや}」と言う。今のロケットの六十六年前の姿である。

この頭部に色々の「出しもの」を仕込んでおく。紙のパラシュートだとか、子供の日傘の様なものを三段五段に吊って赤青の花火の花を夜の空に開かせる。この火矢がごう／＼と唸って高く高く、今の花火の倍も三倍も高く上って、火薬がもえつき、火矢が横になり、次いで下へむく、その瞬間パット出しものが黒闇の空に開く。その火の花は消えないで燦然と空中にかゝっている。その幻怪な美しさは、後の二尺玉の一瞬に消えるはかない美しさとはくらべものにならない豪快なものであったという。この美しさ、火を噴いて夜空に昇る火龍の壮観、これが明治の歴史をいろどる竹原の花火の物語である。

漆黒の空にきらめく火術の玄妙、その妖しい美しさに精魂を打込んだ竹原若連が、晴の長野の煙火大会に意気揚々と、昨日の秋雨にぬかる道にわらじ三度はき替えて踏んでゆく道の向うに事件があった。

この白い朝、その晩の事件はまだわからない。立ヶ花の船橋で橋錢をとられる。押鐘重太夫は立ち止って一人づゝ頭数をかぞえた。

橋を渡ると浅野、それから豊野の旧道、先頭はボー、ボーとホラ貝を鳴らした。豊野の人達とはび出して見た。「あすこへ竹原の龍勢がゆく」赤毛布で頭部を包んだ竹竿をかついでワッショワッショとかけ声かけて、長い隊列は長野へ進んで行った。

長野の「田町の親分」という顔役が竹原龍勢の名声をきいて招いたのだという。吉田を過ぎた頃紋付羽織の迎えが来て「市内をパレードしてもらいたい」と言った。この頃だからパレードとは言わなかったが目抜の大通りを練り歩いて権堂から鶴賀へ出た。

何しろ有名な竹原の龍勢というので黒山の人ばかり、足の疲れも忘れて胸を張って高々と火矢をかついで高土手へ着いた。今の柳町の辺から一面の田で刈りとられた田圃の中に土手があった。これが高土手でこの晩限り龍勢が禁止になった後、大正から昭和のはじめまで二尺玉の打ち揚げ場となった。

午後、他の打ち上げ花火に交って、何本かの龍勢が白煙を引いて秋の空におどり上った。その度に赤青の万国旗やきれいな小さいパラシュートが空中にばらまかれた。この時昼間のものはみんな「火矢吊り」だった。空中高く昇った竹竿を大きなパラシュートで吊ってフワリフワリと落ちるようにする。このパラシュートは内山紙何十枚も張り合わせた畳八枚分も十枚分もあるもので、これを背負って昇るから危険がない代りに出しものを沢山入れてやれない。そこで警察の届けは「火矢吊り」としておいて夜の分は吊らなかった。これが、事件のもとになった。

龍勢を打ち上げるには打上台を高く組立ててここへ火矢を垂直にかける。テレビで見るロケット打上げの形と思えばいい。長野へ着いていらこちらの指示通りに、またゝく間に棒を組んで打上台を作った長野の鳶職の腕前にみんな感心したという。

夜が来た。晩秋の冷気の闇に市街の灯が明滅して、陣場は活況を呈した。合図の弓張りが輪をかいて振られ、竹原煙火組合小野沢良巖、この日の責任者武田元一郎の後姿も一と際緊張して見えた。危険区域百間四方、権堂駅から東には、新地の外殆ど人家はなかった。

その中央に打上台少離れて陣場こうじょう口上小屋、ドンドンドンドンと太鼓を打ってしーんと静まり返ったところで口上をやった。「東西々々こゝに相仕掛おきましたる火術の儀は、竹原龍勢第七号、傘の三段吊り紅白変化菊、首尾よく参りましたら拍手かっさい願います、もししくじりましたらお笑草、先ずは電の如くに打上げまゝすそのため口上左様―。」この左様という語尾を長く引いて切れた瞬間火薬に点火し轟々と火花を吹いて天に昇るその壮観。この口上というものは花火のねうちの半分をきめると言われ村自慢の音声に抑揚つけて、この日の晴れの役目は、小沢音次郎であった。

夜は更ける。火薬の硝煙は人を昂奮させる。そこへ見物人の酒気の渦、止めても止めても危険区域への侵入者、警官がいくら提灯を振って怒鳴っても、あとからあとから這入ってくる。

太鼓が鳴って口上がひゞいて幾度となく水龍は天を駆け、赤や青の火が星よりも美しく夜空に散って、竹原の龍勢は全く他の花火を圧倒した。人々は火の饗宴に酔って夜は更けていった。悲劇は突然として起った。百間四方の危険区域へ這入った酔っぱらいがいくら制止してもきかずどっかり地面に座り込んで「俺は花火が好きだから花火で死ぬなら本望だ。」とテコでも動かなかったと言う。

それにしても当て様と思っても中々当たるものではない。数学的には何万何百万分の一の偶然が突として起った。垂直に猛然として昇った火矢が、星と見える程頂点に達して、出しものをパット散らして、かすかに火の尾を引きながら凄い速さで落ちてくる。普通そんなにうまく垂直に昇らない。竹筒へ火薬をつめるわずかの手加減や、あとで中心にもみこむ錐のホンの少しの差で火矢は斜に昇り甚だしいときは鍋づるになる。中野の東町で上げて箱山へとんだこともある。この時はうまく昇った。あんまりうまく行って魔がさした。

最後の止めの龍勢が押鐘重太夫の作、その一つ前が巧者で鳴る武田伝五右エ門の作ったものであった。よく上った。まっすぐ上ってまっすぐ落ちて来た。口上小屋に居た者は青くなった。まっすぐ頭上へ向って落ちて来る。ヒヤットした次の瞬間惨事は二間の距離で起きた。まるで蛙を刺した様にその男の肩から脇腹へグサット立った火矢はそのまま止って傾いて、打上台へ倒れかかったという。

これが竹原龍勢の最後である。陣場は大変な騒ぎになった。人が走り、提灯がとんで歩き、巡査が駆けつけ、まるで戦争の様な騒ぎであつたという。六十六年前の話であるから伝わった話に幾分の食い違いはやむを得ないが幼時祖父にきいた話に今も残るこの時の生存者の記憶を、今の内にと全村の古老から集めて綴ったのがこの「竜勢物語」である。

責任者は警察へ引かれ、煙火大会は中止を命ぜられ、出発の勢どこへやら、負け戦の様にバラ／＼になってすごくと竹原へ帰って来た。一本木まで来たら夜があげた。中には人を殺したから重い罰になるというので、あわてゝ夜中に須坂をまわって逃げて来たものもあるという。勿論、何の罰もなかったけれどこれで有名な竹原の龍勢はこの夜限り永久に禁止されて惜しいものだがこの豪壮な火術を再び見ることは出来なくなってしまった。名は残った。人を殺したという異常の出来事が深く人の心に残って、長野から中野へかけての古老は今でも「竹原の龍勢」と言えば覚えていてる。

日清戦争の兵士の送迎、竹原のお宮の祭典に盛に打上げた話や、花火に熱中して財産を売った話や、火薬で失敗して家を焼いた話や、数々の話の種を残して、竜勢の代りに庭花火や、打上げが盛になった。打上げ煙火の玉を火乱星くわんせいと呼ぶ、この言葉も今では知っている者は少なくなったが、今竹原の花火を心して見るならばこの龍勢の名残りを、わずかながら存している。第一に昔風の口上がある第二に綱火がある。「一寸百間」三センチで二百メートルの針金を飛ばせる火術の秘伝は竜勢の名残りである。

竹原の花火は今もつゞけられている。